将来の地域との関わり方

――高校を卒業した後、五年後、一〇年後、二〇年後、三〇年後や老後まで――みなさんが今、思っていることを教えてください。

松山　自分は高校を卒業したら、県外の大学への進学を第一希望にしています。一回地元から離れて、地元とは関係ないことを学ぶ予定ですが、そこで関わりを切るという考えがあるわけではありません。

今の時代はインターネットが普及しているので、都会と田舎の隔たりが薄れているような気がしています。

実際に三崎へ赴く必要があるかといわれると、そうではないと考えています。現地に行って活動するよりも、ネットを使ったデジタルな関わり方が個人的に好きなので、そちらで関われたらと考えています。

――都会だけにこだわるわけでも、田舎だけにこだわるわけでもないのですね。

松山　はい。

――インターネットを通してというのは？

松山　まだ全く具体的ではないのでざっくりなんですが、そういう関わり方が理想です。

――それは都会と田舎が違うから両方に関わりたいのか、どちらも同じように考えることができるからですか？

松山　自分は都会のほうが好きですが、地元を断ち切るのは思い入れもあるので無理です。関わりには未練があるので、個人的な好みの部分で関わりたいです。

――何歳ぐらいまでには帰ってきたい、とかありますか？

松山　三崎に帰って、住むことはないです。

将来のことはまだ思いつかないので、大学に行ってから考えていきます。

西条　私はまだ卒業まで一年半ぐらいあるので、高校の間は新一年生を集めたい、というのが大きいです。三崎高校を存続させたいので、そこに力を入れたいです。

高校卒業後は、県外の大学へ行きたいです。

せんたん部の活動を通して、大人や同世代の高校生と関わって思うのですが、いろいろな考え方を持つことが、地域おこしの案を出すことにとって一番大切です。それを身に付けるためには、外や、全く知らない土地に行くことがいいと考えているので……。

県外に出て、世界に出て、いろいろな経験を積んでから三崎や日本に帰ってきたいです。

――ここにいるだけでは、三崎のことは分からないですか？

西条　分からないです。三崎に来る前に知っていたこともありましたが、三崎の良さは住んでみないと分かりませんでした。

そういうことを他の地域に行ってもしたくて、それを三崎やどこかの地域に還元したいです。

――将来、住む場所についてはどうですか？

西条　何十年後かには三崎に帰ってくる予定で、それまではいろいろな所を転々としたいです。

伊方　私は今のところ、将来は公務員がいいと考えています。

そう思うようになったのは、三崎高校に入学して、せんたん部に入って、地域の活動をし始めたことにあります。

進学先の希望は県内で、愛媛大学の社会共創学部に入って、どうしたら地域をもっと盛り上げられるかを学びたいです。

公務員になって、この伊方町に実際に戻ってくるかは分かりませんが、県内に就職して自分が得た知識や経験を生かしていきたいです。地域のために自分ができることをしたい、と今は考えています。

――自分の強みや得意な分野など、実際にしてみて良かったことや、将来に何かつながるのではないかと予感を抱いたものはありますか？

伊方　私は普段の生活で下を向いて歩くことが多いです。直接は関係

ないかもしれませんが、人と見るところがズレているといいますか、考えるところが本当にズレています。

人が気づかないことを考えるのが好きです。独特だと思います。

――それはみなさんも感じますか？

西条　結構な頻度で感じます。

上島　生徒会でも、すごいです。

三崎教諭　変なところに気がつきます。

――上島さんは？

上島　私も伊方さんと同じで、県内にいたい気持ちが強いです。

進学先も迷っていますが、第一志望は愛媛大学の社会共創学部です。

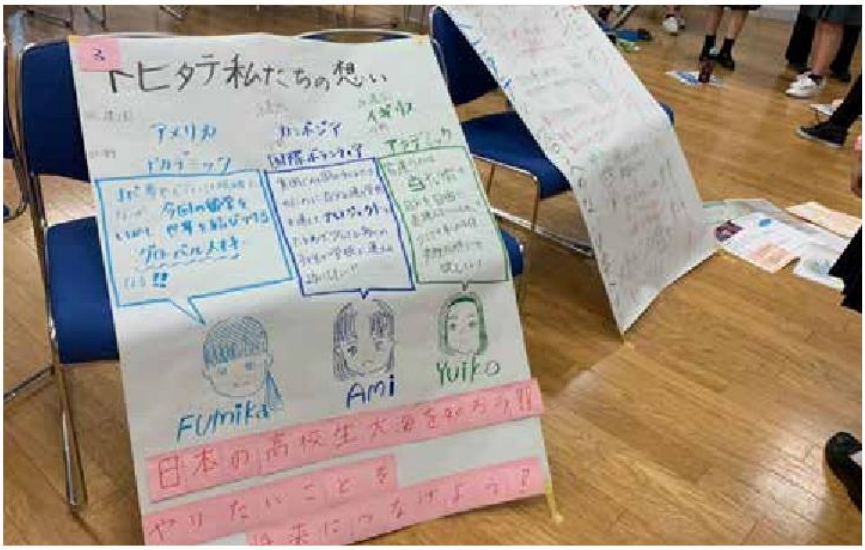
前の二人と逆の意見になりますが、私は直接、見て体験しないと分からない部分もあると考えています。愛媛には三崎と似たような地域がたくさんあるので、たくさんの場所に行って、もっと情報を集めて地元に帰って生かしたいです。

逆に自分が得た意見を県外の人や、世界にいる人に共有したら、もっと良くなるんじゃないか？

県内にとどまるのではなく、外にいる人との関わりはずっと持ちたいですし、三崎が好きなので、行事のときには帰ってきて参加したいです。

将来的に三崎に住むかは分かりませんが、大人になったときには少し、三崎から離れた所で暮らしてみたい気持ちがあります。

友人関係を巡って



――友達との関係については誰もが気にすることですが、皆さんは場合によっては小さい頃からお友達なわけですよね。友達が成長したと感じる場面はありましたか？

上島　他から来た子に三崎の話をしてしまうと、疎外感を与えてしまうといいますか……。

友達に直接言われたこともあります。「三崎じゃないけん、その話、ちょっと分からんな」って。

どちらかいえば三崎高校はそちらのほうが多いです。その子は、三崎に来てからは地域おこしの活動に積極的になって、一年生の頃は人前で話すことがあんまり得意そうではありませんでしたが、いざ人前に出てみるとすごくしゃべるのが上手でした。私は他から来た子の成長を見るほうが多かったです。

――他から来た子と自分の違いや、三崎から上がってきた子との違いを感じて、ライバル意識を燃やすこともありますか？

上島　ライバル意識はないです。

――三崎から上がってきた子にとっては、外から来た人はメキメキと変わるのがよく見える対象なのですか？

上島　はい。

――逆に町外からここに来ると、どういう感じですか？

西条　異国の人みたいといいますか、考え方も違います。

三崎は結構な田舎なので、人が少ないから地域の関わりも近くて、最初はそれがうらやましかったです。同じ中学校同士の子で「あそこ、行こうや」と言っていても、私にはそこがどこなのか分からないことが結構あって、それがうらやましかったです。

住んでみると、今でも分からないところはいっぱいありますが、人数が少ないのでみんなずっと同じクラスです。同級生も二年生は二四人しかいなくて、三年間ずっと一緒のメンバーなので、距離が近くなって、出身もどうでもよくなります。自分たちの中の思い出もどんどんと増えていって、それがうれしいです。

二年生になってからは、「ああいうことがあった」と話す回数が多くなって、私はそういう経験がすごく楽しいし、みんなと長い時間過ごしてきたことが実感できます。

――僕のときは「高校デビュー」がありましたが、皆さんは高校デビューしましたか？

三崎教諭　残りのみんなは旧三崎町出身だから、小さい頃から一緒です。

――もうデビューの感じではない空気ですか？

上島　エスカレーター式です。

三崎教諭　三崎は保育園からみんながずっと一緒です。西条も別に「デビュー感」はなかったです。

西条　私は入学式のあとインフルエンザにかかりました。

三崎教諭　鮮烈なデビュー（笑）。

西条　最初からずっこけました。

教員との関係、先輩後輩関係

――ここまではあらかじめ用意した質問でしたが、「これは伝えたい」ということはありますか？

三崎高校のいいところでも、先生のいいところでも、生徒のいいところでもいいです。

松山　先生の仲がすごくいいです。職員室の雰囲気も明るいです。

上島　先輩と後輩で敬語もありますが、それを除いたら仲がいいです。こんなに仲良くして大丈夫なのかと自分が思ってしまうぐらいですが、自分が二年生や三年生になって、後輩の子たちが緊張せずに気軽に話し掛けてくれるのがすごくうれしいです。私が一年の頃は、三年生に話し掛けるのはすごくビクビクしていました。

他の先生に聞きましたが、三年生が一年生の教室に入ることや、一年生が三年の教室に来ることは、普通の学校ではないと言われて――。

私たちからしたらそれが普通です。

他から見たら学年の差がないぐらい、生徒同士の仲がいいです。

みんなに知って欲しいこと

西条　私は小さい学校に来たことがなかったので、さっきも言ったように後輩が先輩に「○○先輩」と呼ばないことに、最初はびっくりしました。

三年生に向かっても「○○さん」とか下の名前で呼んでいて、それが新鮮でびっくりして、オロオロしました。教室にも普通に同級生のように先輩がいて……。怖かったわけではないですが、驚きはありました。

みんな仲のいい証拠で、それを見て三崎高校を選んで良かったと感じました。

先生たちも結構、フレンドリーな感じです。

私は中学校のときには絶対に先生にはなりたくないと思ってました。先生はいつも忙しそうに何かに追われている感がすごくて、先生になる意味が分からないと感じていました。

三崎の先生は、追われていたとしても楽しそうにしていて、キラキラ輝いている感じがすごくいいです。先生には絶対にならないと思っていましたが、先生もそんなに悪くないという気持ちになりました。

――西条さんの目には、生徒同士だけではなく、先生も光っているように見えるのですか？

西条　「アレしないけん、コレしないけん」と先生はいつも言いますが、

それが嫌そうではありません。先生たちも楽しんでいるので、生徒も楽しめている感じがします。

伊方　三崎高校は全学年で一クラスずつで、他の高校に比べたら少ないですが、逆に一人ひとり、「したいことができる」といいますか。

さっきみんなも言っていましたが、先生との距離が近いので、先生からも「こんなイベントがあるよ」と勧めてもらえます。

西条ちゃんは今度、「トビタテ」というのに参加するらしいです。

三崎教諭　どこに行くか知っていますか？

伊方　アイルランドです。

他にもリーダー養成塾に参加する子や、去年だとOne Young Worldだとか……。

他校だと声を掛けられる人も限られているし、超優秀な人だったり、すごくやる気がある人だけになってしまいますが、三崎高校では気軽に、興味を持ったら参加できる空気感があります。

そこが三崎高校のいいところです。体育祭も文化祭も、いろいろなことができます。

オブラートに包んだみたいで、すみません（笑）。

高校魅力化の目的と生徒にとっての意義

――三崎高校生徒の学びについての語りから

樋田有一郎

高校魅力化は生徒にとってどのような意味があるのだろうか。われわれは、素朴に疑問を持った。文科省の政策的な意図や、学校の教育的意図、地域からの期待、現代社会にとっての意義……、われわれはそうした観点から生徒の学びを見てしまうことが多いのではないだろうか。そのこと自体が有意義であることは間違いないが、そのまえに、そもそも生徒にとって、高校魅力化の取り組みはどのような意味を持っているのか。私たちは、そうした素朴な疑問に取り憑かれた。

われわれの高校調査は、これまで参与観察が中心であり、個々の場面での生徒の言動や、場面に即した簡単な聞き取りを行ってきた。その結果、個々の場面での断片的な生徒像を捉えることができたが、全体像をつかむことが困難であり、生徒の包括的な様子を報告書の読者に知ってもらうことも困難であった。

『地域人材育成』第一号は、愛媛県立三崎高等学校せんたん部生徒へのインタビュー結果を報告する。今回は、包括的と言うにはおこがましいインタビューであるが、これまでは知ることのなかった側面を知ることができた。

☆

三崎高校訪問インタビュー調査の全体像を紹介すると、インタビュー対象者は校長先生、せんたん部担当教諭、高校魅力化に協力する住民二名、町役場職員、そして生徒四名を対象とした。生徒インタビューは四名に対する集団インタビューの形式をとり、担当教諭に同席していただいた。本人及び高校の了解のもとで録音され、後日、業者によってテープおこしされた。生徒インタビューの概要については、報告書冒頭を参照されたい。

三崎高校は昭和二五年度の開設で令和元年で六九周年を迎えた。報告書冒頭の繰り返しになるが、全校生徒は八四 名（令和元年）で、生

徒数減少のため本校の位置づけから分校の位置づけへの高校再編の危機にあった。

所在地の伊方町にはいくつかの元気なＮＰＯがあり、町に加えてＮＰＯ関係者からの強力な支援を得ている。

三崎高校は一人一人の生徒が輝くことができることを謳っている。このことは生徒インタビューの印象と一致している。三崎高校は少人数だからこそ、いわゆる「個別最適化された学び」を行い易い高校である。

三崎高校は愛媛県の「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」の指定を受けており、生徒は地元の祭りの支援、イベントの支援、ボランティア活動を積極的に行っている。特色のある教育活動としては、生の蜜柑を包んだ「みっちゃん大福」の開発と販売、漂流ブイを活用した「ブイアート」プロジェクトの実行、さまざまな高校、大学、ＮＰＯ、役場職員などが参加した「せんたんミーティング」の開催、健康体操（「みさこう体操一一五」）の考案と施設・イベントでの普及活動、映画『せんたんビギンズ』の制作と上映など、多岐にわたっている。

☆

本報告書は〝生徒の学び〟を報告することが狙いなので、ここでは、三崎高校の教育改革を特徴付ける高校魅力化については、背景として簡単な説明をするにとどめたい。

島根県で始まった高校魅力化は離島・中山間地域の高校で中退率が高まり、入学生徒数が減少する中で、高校生活と進路形成との両面で生徒が魅力を感じることが出来る高校を作ろうとしたことが始まりであった。今から、高校魅力化という名前で改革を始めようとしている高校も概ね同じ方向性にある。

魅力化を図るための方法として当初も今も有力視されているのが「地域の特色を生かした教育」である。活性化に向けて歩み出した地域には学びの課題があり、地域住民は高校教育の支援に（高校とともに地域を活性化することに）積極的である。

われわれが知っている事例では、高校が地域の教育資源を高校の都合で一方的に利用しようとする姿勢でいると住民や町が戸惑うことになる。住民や町と生徒が協働で地元の課題に取り組むときに高校魅力化の教育改革はめざましい魅力を生み出している。

※高校魅力化の取り組みについては、樋田・樋田（二〇一八）や地域教育魅力化プラットフォーム（二〇一九）で紹介されているので詳細はそちらをご参照いただくか、あるいは、われわれの研究会のホームページ（「地域人材育成研究会」で検索してください）をご参照いただきたい。

☆

生徒インタビューの生徒の語りから、これまでの研究では焦点を当てられることが少なかった四つのことを指摘しておきたい。

第一は、生徒は、「地域の人に笑顔になってもらうのは、すごく達成感を覚える側面でもあります。」、「みんなの笑顔につながっていくので、すごくやりがいになります。」などの表現で、（地域の人の）笑顔という表現を使っており、それが生徒の動機付けになっていることである。

第二は、「マイナスな意見を言われて感情的になるのではなく、客観的な意見なら改善する必要もあるんじゃないか？　逆に改善する必要はなくて、このままでいい伝統的な部分はちゃんと残すように向き合っていく必要もあるんじゃないか？　と受け止めたいです。」「少しでも良くできるなら、良くしていけばいいことです。」などの語りに見られるように、地元を好きか否かではなくて、働きかける対象として地元を見ることができる。しかも、それを自分自身の言葉で語ることができている。

第三は、生徒は、「三崎は自分がしなければ誰もしてくれないことがたくさんあります。自分から積極的にやる必要があるので、誰かを待つのではなくて自分で前に出ていけるようになったのが一番、成長したところです。」、「活動のなかでたくさん人前に出る機会が増えたので、人前で話す力や緊張をしなくなった面では成長できました。」、「距離が近いので、あの子に言ったらしてくれそう、というのが見て分かるようになりました。それで同じ学年の人にも話しかけられるようにもなったし、変われました。」、「悩む前にとりあえずやってみたらいい、と思うことが増えました。」などと語っており、学んだと思うこと、成長したと思うことに関しては、仲間との関係作りが上達したことや、人前で話せるようになったことが語られている。しかもそうした成長をしたことに自覚的であり、しっかりと語ることが出来ることである。

第四は、三崎高校は卒業後に地元を離れて県内外の大学に進学する者の割合も高い。インタビュー対象の生徒は、卒業後にいったん地元を離れてから地域や友人とどう関わるかという視点から自分の将来を考えていた。このことは、生徒が自発的に「関係人口」すなわち、町外に住みながら町に関心を持ち町に対する支援を行う人としての自分の将来像を描き始めているという点で興味深い。

三崎高校の取り組みの生徒にとっての大きな意味は、文科省が描いている地域学校協働を成功させることではない。また、地方創生という社会的使命を達成することでもない。そうしたことに意味がないわけでは無いし、そうしたことを意識して学ぶことは地域とのつながりが強い高校教育の重要なゴールでもある。

しかし、生徒は笑顔を見ることを強い動機付けにしている。学びの面では、自分自身の成長を自覚し自分の言葉で語ることができている。進路意識の形成の面では、高校の地元地域とどのように関わるかという視点（関係人口の視点）を含んだ進路意識を自発的に形成している。

これらのことは、文科省の政策的な意図や、学校の教育的意図、地域からの期待、現代社会からの要請とはやや異なるものである。インタビューの中で語られたことは、地域の特色を生かした教育の学習指導や進路指導が狙いとしていることに対して再考を促すものである。

最後になりましたが、三崎高校の生徒と先生方の協力をえて、生徒インタビューの実施と本報告書への掲載を行わせていただきました。感謝いたします。

また、本報告書を手にした中学生とその保護者の方に対しては、本報告書を三崎高校での高校生活を知る機会としていただけると幸いです。

本誌に使用されている写真に関しては、三崎高校から本誌での使用の許可を得た。

〈参考文献〉

・樋田大二郎・樋田有一郎　二〇一八　『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト――地域人材育成の教育社会学』、明石書店

・地域教育魅力化プラットフォーム　二〇一九　『地域協働による高校魅力化ガイド：社会に開かれた学校をつくる』、岩波書店

高校魅力化プロジェクトとは

その地域・学校でなければ学べない独自カリキュラム、学力・進学保証をする公営塾の設置、教育寮を通じた全人教育の３本柱で、多くの生徒が行きたい、保護者が通わせたい、魅力ある高校にするプロジェクトです。
グローバルとローカルを結ぶグローカル人材の育成、答えが一つに定まらない時代に、決断を答えにする、21 世紀スキルを持った人材を育成します。
http://c-platform.or.jp/
https://miryokuka.com/

〈編集後記〉

『地域人材育成研究』発刊に寄せて

近年の研究動向を見ると、研究関心が狭くなり蛸壺（たこつぼ）化しがちです。もっと、ひどい場合にはそもそも現場という大海に入ることすらしないでプールに浮かべたマットの上で、海をイメージして、イメージしたバーチャルな大海の課題を論じる研究もあります。プールと海の違いが分かっていないのです。

私たち地域人材育成研究会は海に飛び込みました。海に慣れていないので、自分たちがどこにいるのか、目の前で起きていることがなにものなのか、よく分かりません。

私たちに見えているのは、学歴主義（産業主義）の価値から地域主義の価値へという教育の価値の潮流です。そしてこれは社会における価値の潮流に呼応していると考えています。私たちはこの潮流に向かって漕ぎ出した高校と地域を、研究者の立場から応援したいという衝動に駆られています。

『地域人材育成研究』は、当面の間、私たちの研究会の見聞録、すなわち収集した資料の発表の場として、あるいは分析と考察の成果報告の場として使わせていただきます。将来的には、同じ志の皆さんの発表の場にしたいと考えています。

私たちが蛸壺に逃げ込む誘惑に負けないように、みなさんの叱咤激励をお願いいたします。

地域人材育成研究会代表
樋田大二郎

地域人材育成研究

第1号

二〇二〇年一月三一日発行

特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立三崎高等学校
せんたん部生徒インタビュー

編集・デザイン：金子あかね・金子純一

発　　行：地域人材育成研究会

地域人材育成研究 1

特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介
愛媛県立三崎高等学校せんたん部 生徒インタビュー

発行：地域人材育成研究会